



連峯堂 彩り 秋号

RENPOUDO'S COLLECTION AUTUMN



OKUDA RENPOUDO
奥田連峯堂

TEL : 075-561-3655
FAX : 075-525-1148

営業時間 11:00 - 18:00

定休日 毎週水曜日

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>
✉ renpoudo@nth.biglobe.ne.jp

HP



Instagram



1.

花扁壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

径（口径）16.8cm×11.2cm 高さ18.8cm

民藝の巨匠・河井寛次郎による、溢れ出る生命感と独創的な造形美が凝縮された逸品です。

ねじれを加えたような多角形の面取フォルムと、扇形に開いた口縁が力強い立体感を生み出しています。白釉の地に、辰砂（赤）、呉須（青）、鉄釉（茶）を用いた寛次郎特有の筆致で抽象的な花文様が伸びやかに描かれており、口縁部と高台際を引き締める鉄釉の輪郭が全体を端正に調和させています。



2.

草花図長角鉢

河井 寛次郎

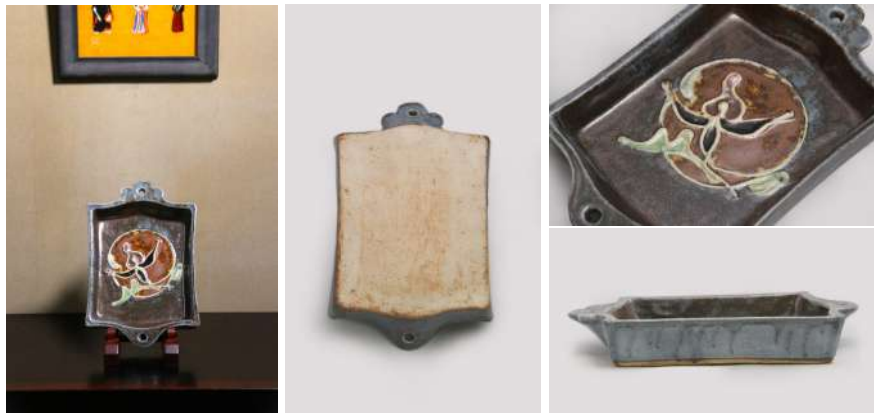
共箱
昭和
径30cm×19cm 高さ4.5cm

近代日本陶芸界を代表する巨匠・河井寛次郎による、端正な造形と伸びやかな意匠が調和した長角鉢です。

角にやや起伏をもたせた長方形のフォルムに、上下には穴のあいた耳が意匠として添えられています。全体は深みのある濃紺や鉄釉調の釉薬で引き締められ、中央の丸窓の中には、筒描きの白い縁取りで可憐な草花文様が生き生きと描かれています。

釉薬の落ち着いた質感と中央の温かみある色合いの対比が美しく、飾りの器としても格別な存在感を放つ名品です。

草花図の部分に焼成時にできた窯キズが見られます。



3.

練上扁壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

口径6.4cm×5.5cm 径13cm×20.5cm 高さ 15.1cm

近代日本陶芸界を代表する巨匠・河井寛次郎による、練上文様が目を引く美しい扁壺です。

異なる色の胎土を重ね合わせて練り込むことで生まれる、マーブル模様や波紋を思わせるデザインが器面全体を包み込んでいます。独特の張りのある扁平フォルムと、白と黒褐色の粘土が生み出す緻密で躍動感あるグラデーションが見事に調和し、寛次郎ならではの卓越した造形力と高い技術力がうかがえます。

静寂な佇まいの中にダイナミックな生命力が宿る、飾る空間に溢れる存在感をもたらす逸品です。



4.

黒扁壺

河井 寛次郎

共箱

昭和

口径6cm×6cm 胴径9.5cm×14cm 高さ18.5cm

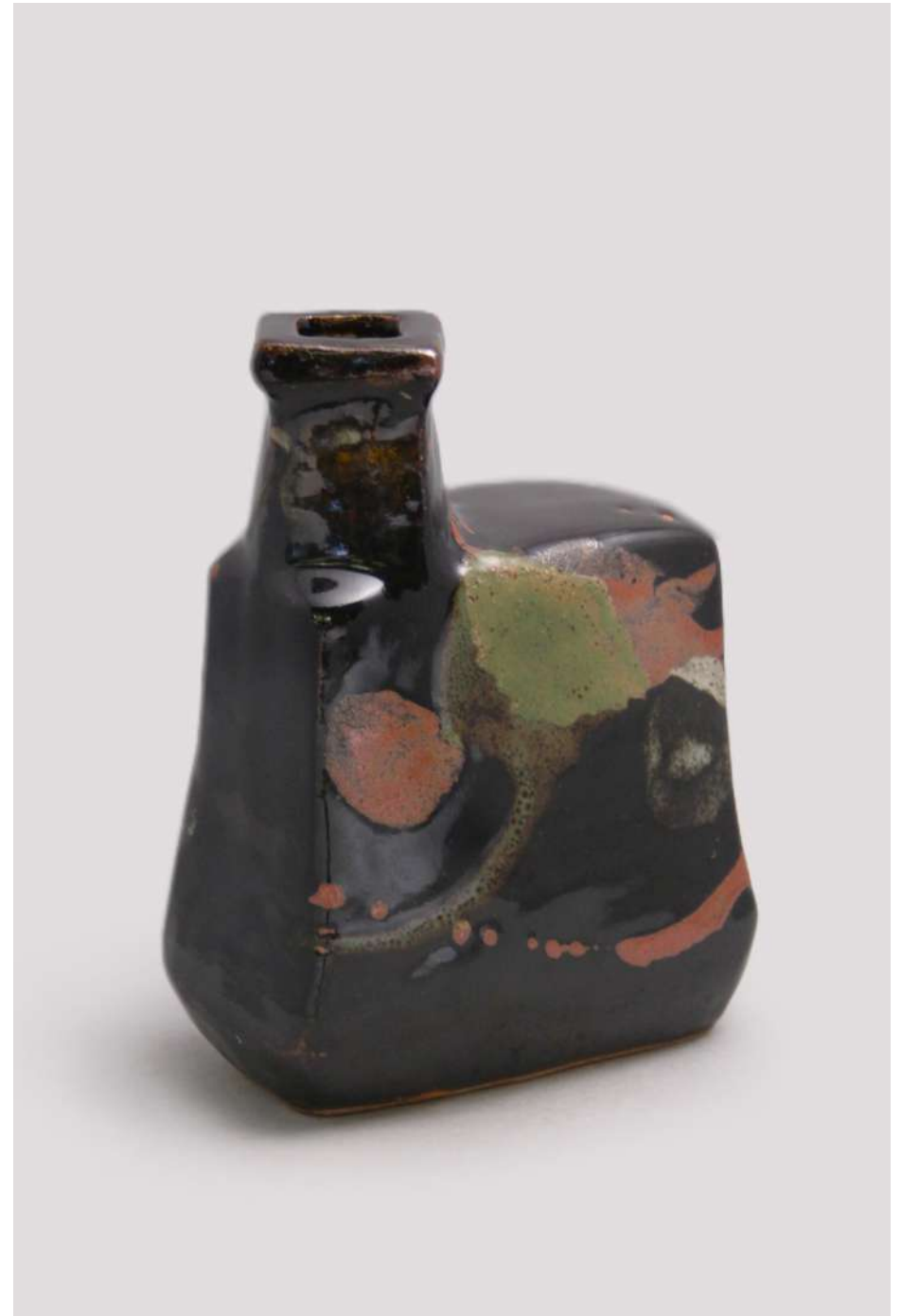
近代日本の陶芸界および民藝運動を代表する巨匠・河井寛次郎（1890-1966）による、力強い造形美と豊かな彩釉が魅力的な黒扁壺です。

重厚で艶やかな黒釉をベースに、緑釉や辰砂（赤釉）などの彩釉を動的に施し、鮮やかな色彩のコントラストを生み出しています。ダイナミックな造形と、寛次郎ならではの自由気ままな釉描の妙が融合した、圧倒的な存在感を放つ作品です。

肩の部分に釉切れが見られます。



反対側



5.

黒釉盛絵花瓶

濱田 庄司

共箱

昭和

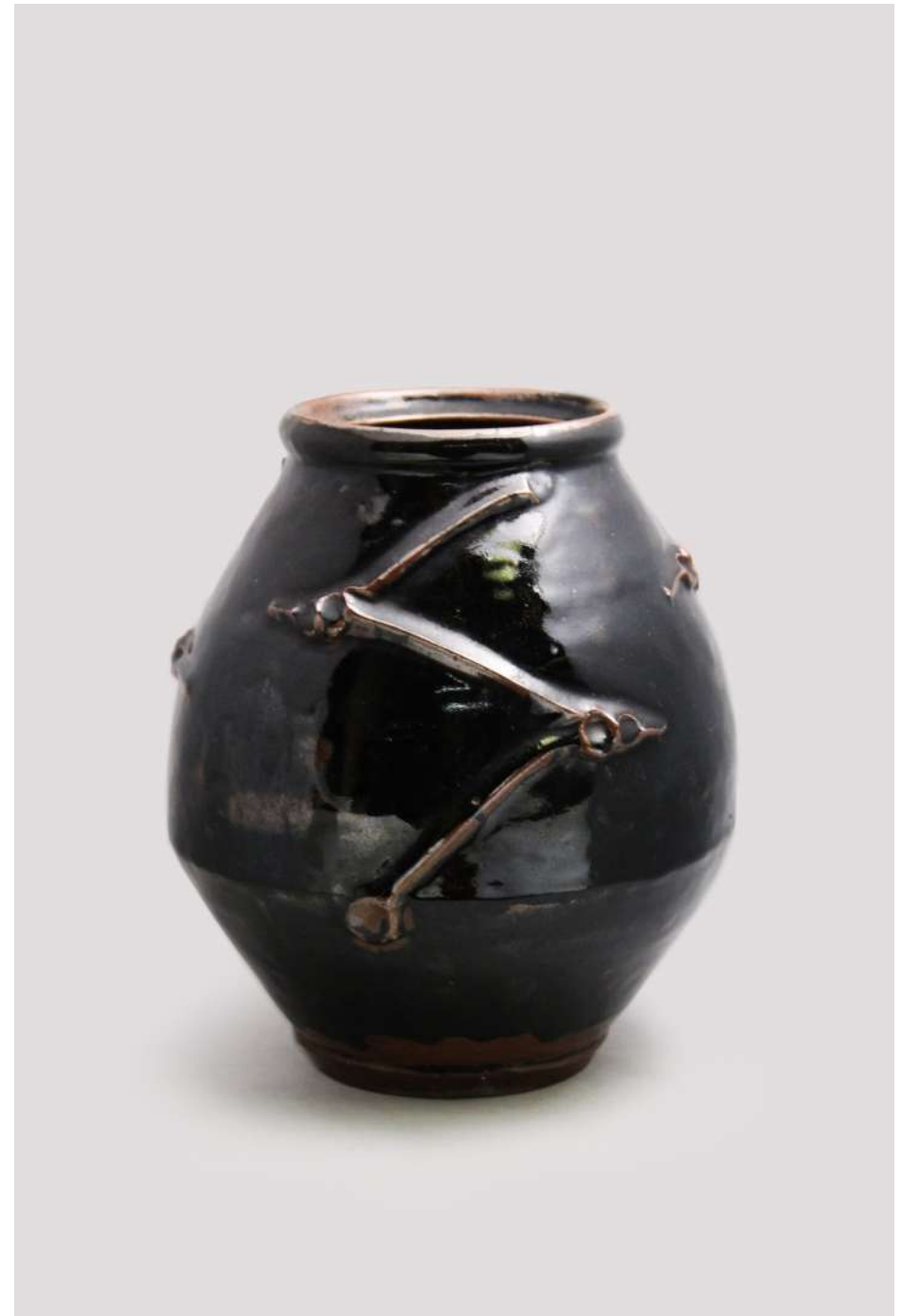
人間国宝

口径15.5cm 胴径26cm 高さ31cm

民藝運動の推進者であり、人間国宝に指定された巨匠・濱田庄司による存在感あふれる逸品です。

ふっくらと豊かに張った健やかなフォルムに、深く艶やかな黒釉がたっぷりと施されています。漆黒の磁肌には、濱田特有の「盛絵（もりえ）」技法により、幾何学的でダイナミックな模様が立体的に描かれており、エッジ部分にのぞく素朴な風合いが豊かなアクセントとなっています。

益子の土と窯変が生み出すおおらかな質感と、現代的で力強い意匠が見事に融合した、濱田作品ならではの質実剛健な美を放つ名品です。



6.

柿釉抜絵花瓶

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

口径12cm 胴径19.5cm 高さ21.5cm

近代日本の民藝運動を牽引した人間国宝・濱田庄司
(1894-1978) による柿釉抜絵花瓶です。

柿釉の地に、ろうそくの蠟などを施す「抜絵（ぬきえ）」技法により、力強く伸びやかな濱田の代名詞とも言える「唐黍（とうきび）文」が描かれています。深みのある温かな柿釉の発色と、おおらかで堂々とした器形が見事に調和しており、濱田作品ならではの質朴で力強い美徳が存分に表現された逸品です。

口縁部に焼成時にできた釉切れが見られます。



7.

香炉

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

径10.7cm 高さ8.5cm

日本の民藝運動を牽引した人間国宝・濱田庄司による香炉です。

素地に流れるような白刷毛目を施し、その上に濱田の代名詞とも言える「唐黍（とうきび）文」が鉄絵で大胆かつ伸びやかに描かれています。無駄のないおおらかな造形と、勢いのある筆致が見事に調和しており、濱田作品ならではの質朴で力強い健康的な美が凝縮された逸品です。

本作品は火屋（ほや・蓋）は付属しておりません。



8.

扁壺

バーナード・リーチ

芹澤銑介極箱

口径5.5cm 胴径13cm×9cm 高さ19cm

東洋と西洋の美意識を融合させ、現代陶芸に多大な影響を与えた巨匠バーナード・リーチによる格調高い扁壺です。

温かみのある白釉の肌を背景に、刷毛目風の文様を配し、赤絵による市松状の幾何学意匠が伸びやかに描かれています。リーチ特有のどこかモダンで普遍的な造形美と、素朴な絵付けが見事な調和を見せています。

さらに本作には、民藝運動をともに歩んだ型絵染の人間国宝・芹澤銑介による箱書が添えられており、両巨匠の深い交流と互いへの敬意を感じさせます。

胴の部分に釉切れ、および高台（底面）に焼成時の窯キズが見られますが、いずれも制作過程で生じたものです。



反対側



9.

象嵌赤絵草花文花型組皿 6客組

島岡 達三

共箱

昭和 - 平成

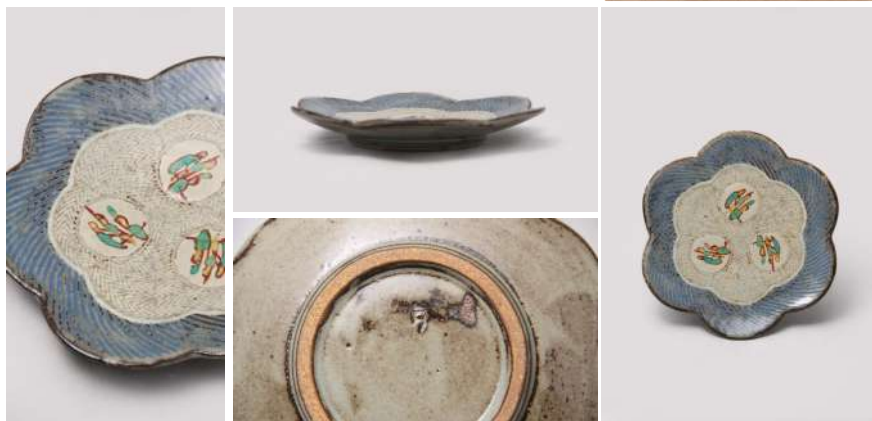
人間国宝

径21.5cm 高さ2.8cm

人間国宝・島岡達三の真骨頂である縄文象嵌（じょうもんぞうがん）に、華やかな赤絵を加えた趣豊かな花型のお皿です。

愛らしい花形の器面に、代名詞でもある組紐による縄文象嵌が施され、中央には丸窓の中に色鮮やかな赤絵草花文があしらわれています。青みを帯びた呉須風の縁取りと象嵌の素朴な質感、そして赤絵の華やかさが絶妙な調和を見せています。

民藝の質実剛健な温もりと、食卓を明るく彩る華やかさを兼ね備えた、島岡作品ならではの魅力に満ちた逸品です。



高台内に「タ」印



10.

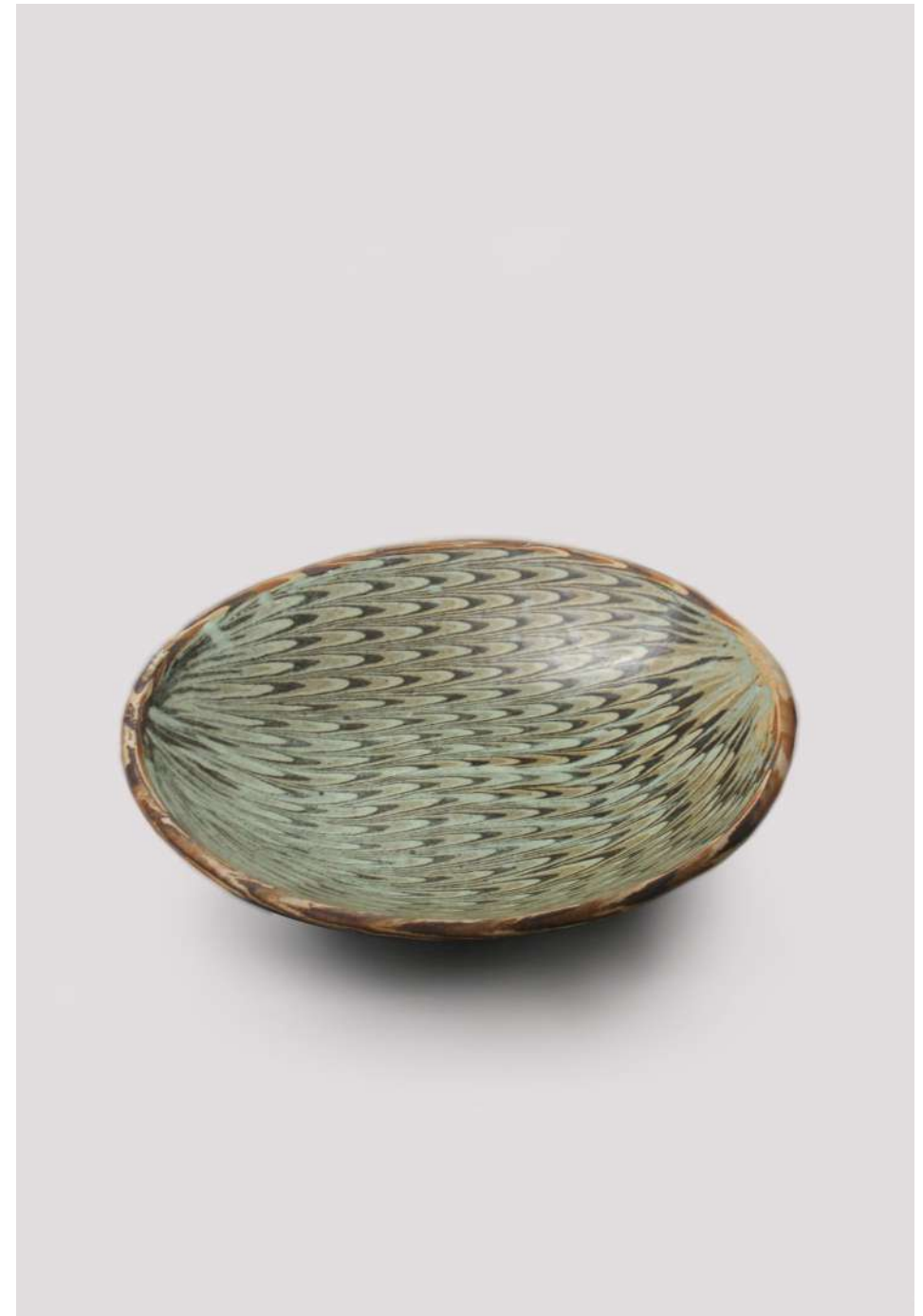
練上鶉手飾大鉢

上田 恒次

共箱
昭和
径52cm 高さ11cm

民藝の精神を背景に独自の造形美を追求した陶芸家・上田恒次による練上の代表作です。練上は、師である寛次郎との強い絆を象徴する技法であり、上田はその教えを受け継ぎながら、自身の世界観を確立しました。色合いの異なる土を幾重にも重ね合わせることで生み出された波状の文様が、器全体に美しいリズムと躍動感を与えています。径52cmという存在感あふれる大作でありながら、細部にまで緻密な職人技が行き届いた逸品です。

共箱には「於洛北木野皿山窯製之 昭和47年春吉辰」と記されており、1972年春に洛北の木野皿山窯にて手掛けられた背景が明瞭にうかがえます。



1 1.

三彩山水図大皿

源内焼

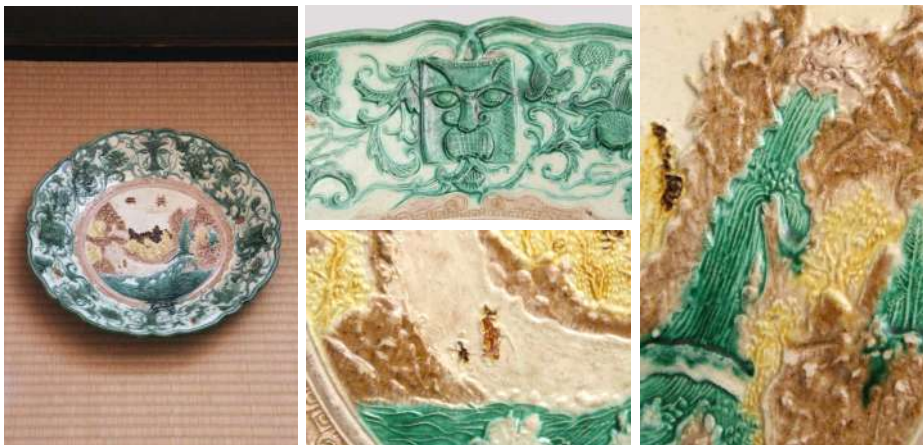
江戸時代

径34.5cm 高さ5.5cm

江戸時代中期、讃岐国志度（現在の香川県さぬき市）で平賀源内の指導により始まったとされる「源内焼」の見事な大皿です。

型押しの緻密な技法により、見込みの中央には遠山や楼閣を望む緻密な山水風景が情趣豊かに浮き彫りにされています。その周囲の縁には、異国情緒あふれる幾何学文様や唐草の意匠が精巧に巡らされています。

鮮やかな緑釉を中心に、黄や褐色の釉薬を巧みに掛け分けた三彩の彩りが極めて美しく、大ぶりのサイズも相まって圧倒的な存在感を放ちます。



1 2.

赤絵花卉遊禽図四方花瓶

四代 三浦 竹泉

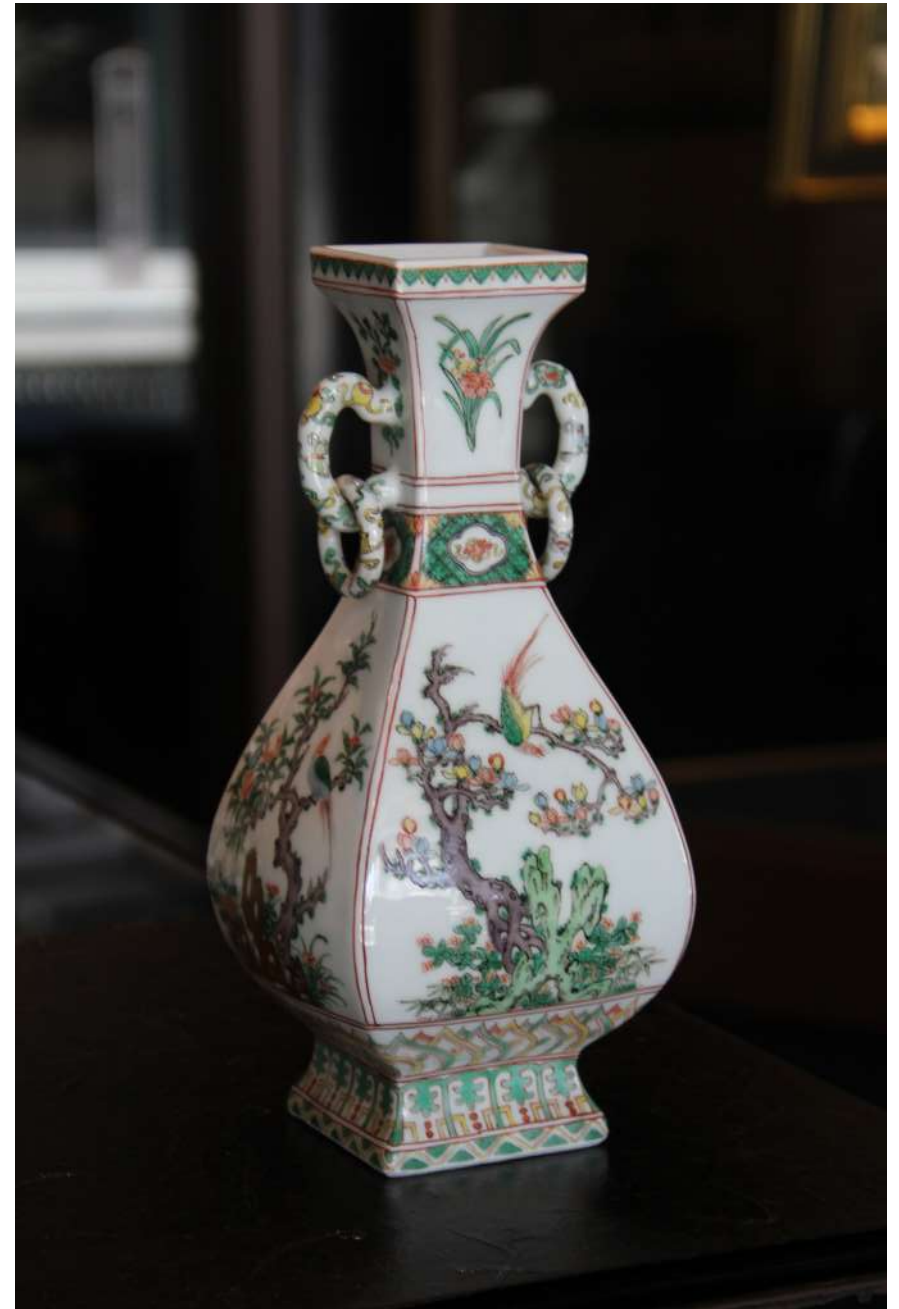
共箱

昭和

口径6cm×6cm 胴径12cm×12cm 高さ27cm

京焼・清水焼の名門として精緻な絵付けで名高い、
四代三浦竹泉による繊細優美な四方花瓶です。

端正な角型の意匠に、遊環（ゆうかん）を備えた耳がアクセントとなり、格式高い雰囲気醸し出しています。滑らかな白磁の面に、鮮やかな赤や緑、黄色をはじめとする色絵で、美しい花々（花卉）と羽を休める鳥（遊禽）の姿が緻密に描き込まれています。



13.

湖水風景文花瓶

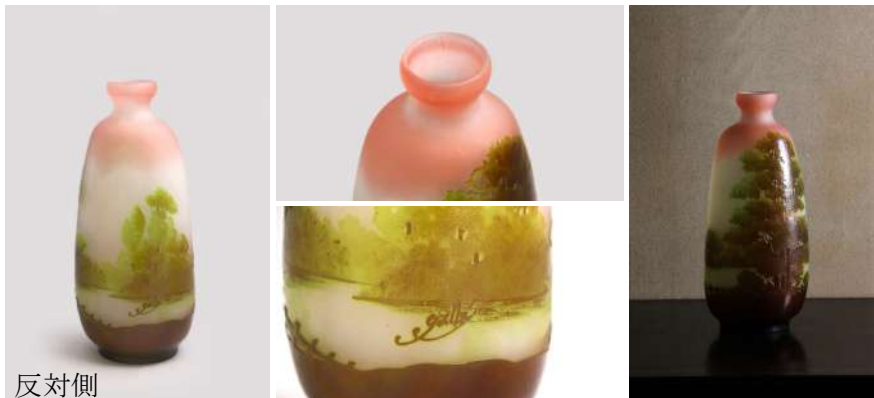
エミール・ガレ

口径5.2cm 胴径10.5cm×12.5cm 高さ29cm

アール・ヌーヴォー期を代表するガラス工芸の巨匠、エミール・ガレ（1846-1904）による、静謐な自然の美を見事に映し出した花瓶です。

ほんのりとした桃色から白へと移ろう美しいグラデーションガラスを地に、多層のガラスを重ねて酸化腐蝕彫り（アシッド・エッチング）を施すことで、湖畔に佇む木々や水面の景色を立体的に表現しています。夕暮れや朝モヤを思わせる柔らかな背景の色彩と、手前に深く描写された樹木のコントラストが素晴らしく、光を透かすことで奥行きのある幻想的な風景が浮かび上がります。

側面の湖水近くにはガレのサインがあります。
詩的で叙情豊かな世界観を心ゆくまで堪能できる作品です。



14.

ケマン草文花瓶

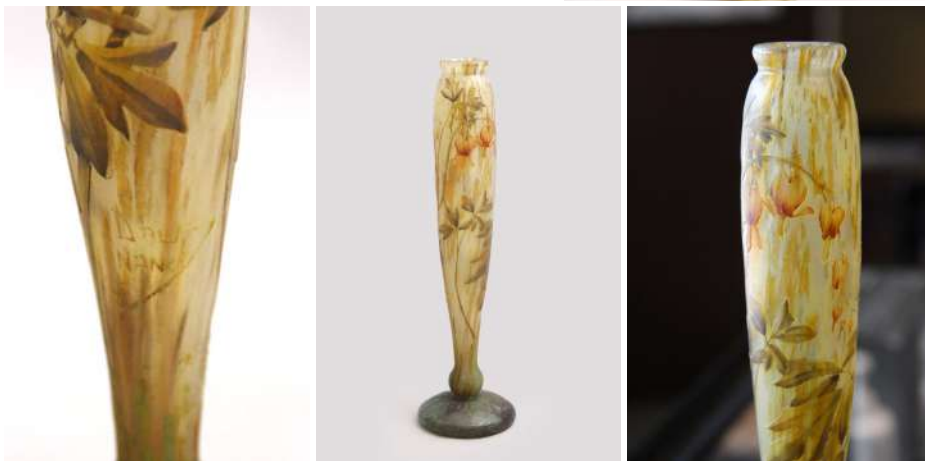
ドーム・ナンシー

口径3.3cm 高台径7cm 高さ26cm

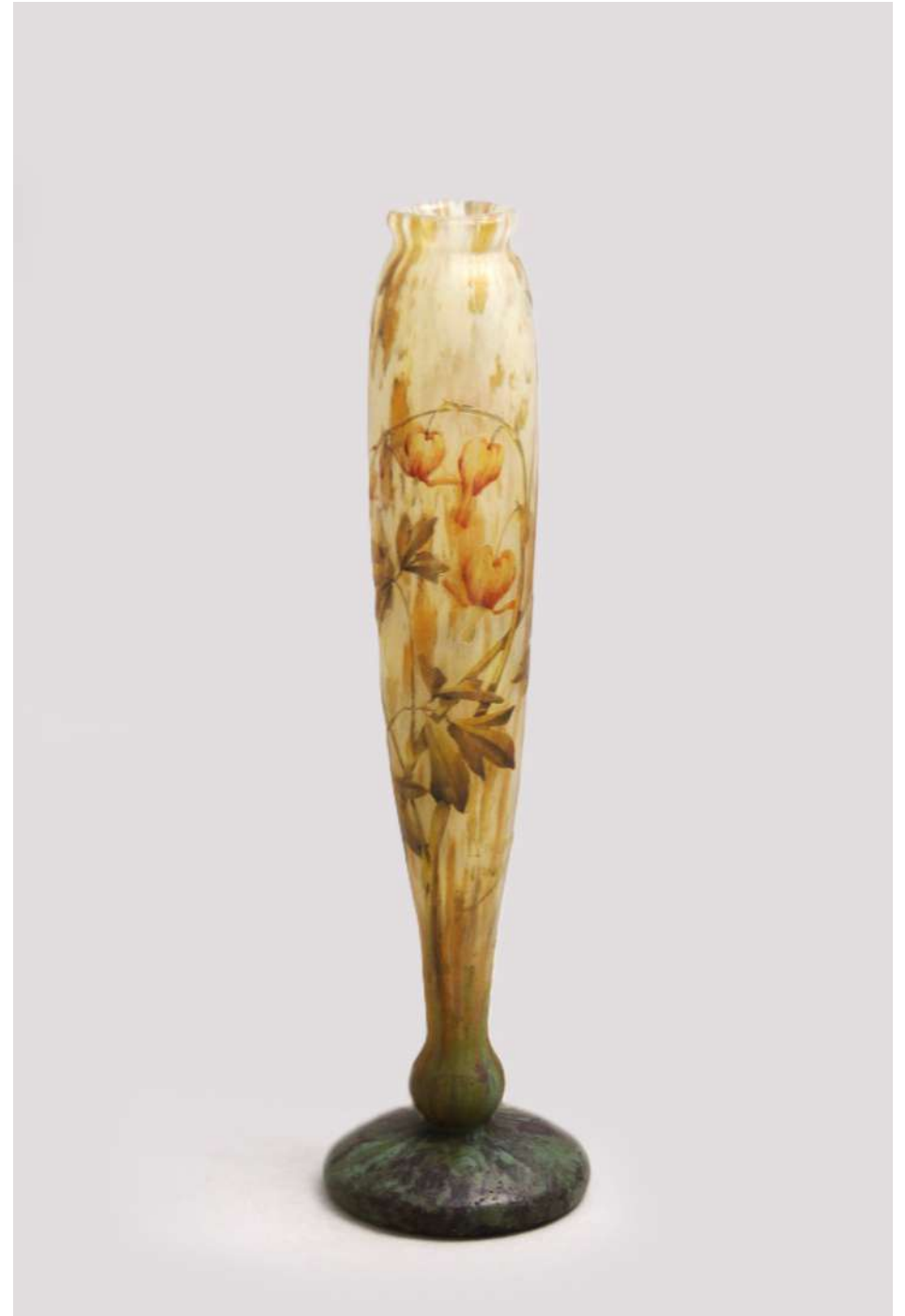
アール・ヌーヴォー期を代表するガラス工芸の名門、ドーム兄弟（ドーム・ナンシー）による、優美な細身の形が印象的なケマン草文花瓶です。

黄色やクリーム色の素地に、被せガラスと酸化腐蝕彫り（アシッド・エッチング）で、可憐に揺れるケマン草の姿を立体的に描いています。下部に向かって足元を絞り、台座へ繋がる優雅な造形美と、自然の移ろいを捉えた柔らかな色彩美が見事に融合しています。

胴下部には「Daum Nancy」のサインが刻まれております。



「Daum Nancy」のサイン



15.

自然釉花入

辻村 史朗

共箱

径23cm×25cm 高さ56cm

独学で陶芸を修め、作品の力強さと自由奔放な作風で国内外から高い評価を受ける陶芸家・辻村史朗（1947-）による、圧倒的な存在感を放つ大型の自然釉花入です。

重厚で荒々しい土味に、窯中で降りかかった薪の灰が美しく溶けて緑色のビードロ釉となり、力強い景観を生み出しています。自然の猛威と炎の軌跡をそのまま形にしたかのような豪快な造形美は、辻村作品の真骨頂と言えます。

花を生けやすくするための「落とし（筒）」が付属しております。

焼成時にできたと見られる、底面から胴部にかけて窯裂け（地割れ）が見られます。



16.

古染付 芙蓉手七寸皿 10客組

中国 明時代（17世紀）

径21cm 高さ3.7cm

中国・明代末期に日本の茶人からの注文により景德鎮窯で焼成された、味わい深い古染付の芙蓉手皿です。

見込みの中央には岩に佇む水鳥と草木が伸びやかに描かれ、その周囲には芙蓉の花弁に見立てた区画（窓枠）の中に文様が配されています。古染付特有の深みのある呉須の発色と、虫食い（縁の小さな釉剥げ）が見せる素朴で力強い風合いが大きな魅力です。

1客のみニューを直したものがあります。

使い勝手の良い七寸（約21cm）サイズです。



17.

扇面蒔絵大棗

径8.5cm 高さ8.5cm

艶やかな黒漆の肌に、開いた扇の形を大胆に配した格式高い大棗です。

蓋から身にかけて流れるように描かれた扇面の中には、精緻な高蒔絵や切金の技法を駆使し、流水に咲き誇る菊や梅の意匠が密度高く表現されています。



18.

ガラス絵「人形三体」

芹澤 銈介

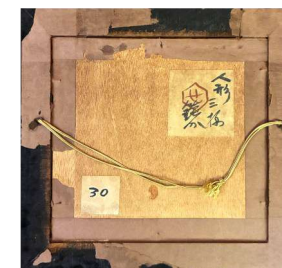
共シール

額のサイズ：縦28cm 横29.5cm

人間国宝であり、日本の染色界および民藝運動を代表する染色家・芹澤銈介による、温もりあふれるガラス絵作品です。

温かみのある黄色の背景に、愛らしく個性豊かな三体の人形が味わい深いタッチで並んで描かれています。ガラスの裏側から色彩を塗り重ねていくガラス絵特有の透明感と鮮やかな発色が活かされており、芹澤ならではの卓越した意匠センスと民芸美が凝縮された魅力的な一品です。

額裏に経年による破れ・傷みが見られます。



額の裏側

19.

額「牛歩遅々踏大地」

須田 剋太

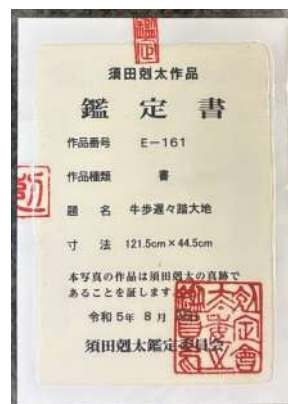
須田剋太鑑定委員会 鑑定書有

額のサイズ：縦140cm 横64cm

日本の現代洋画界・書道界において、既成の枠にとらわれないダイナミックな表現で独自の境地を切り拓いた鬼才・須田剋太による、極めて力強く精神性の高い書作品です。

本作に書かれている「牛歩遅々踏大地」という言葉は、「焦らず、慌てず、着実に、牛の歩みの如く一步一步大地を踏みしめていこう」という、現代を生きる私たちの心に深く響く格言です。1984年の作であることを示すサインと落款が鮮やかに残されており、画面全体から溢れ出る圧倒的な墨の勢いと太い筆線は、まさに大地を踏みしめる牛の力強さと、作家自身の不屈の芸術精神を体現しているかのようです。

存在感のある本作品は、空間に格式と力強いエネルギーをもたらす作品として最適です。



20.

板画「倭壺妃の柵」

棟方 志功

棟方巴里爾シール

額のサイズ：縦38cm 横41cm

ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展での国際版画大賞受賞をはじめ、世界的な評価を獲得した巨匠・棟方志功による、生命力あふれる貴重な彩色板画作品です。

棟方が生涯にわたり情熱を注いで描き続けた、ふくよかで神秘的な女人をモチーフにした作品です。横たわる肉体のしなやかなラインと、黒い輪郭線から溢れ出すような鮮やかな赤、青、黄の色彩配置は、大地のような力強い生命感が感じられます。画面左下には、「志功」、「Munakata」のサインがあります。

棟方志功の長男、棟方巴里爾による鑑定シールが付いています。

本作品は、現代の私邸のリビングや書斎、和室の床の間など、場所を選ばず美しく映える手頃な大きさです。



21.

板画「目覚めの柵」

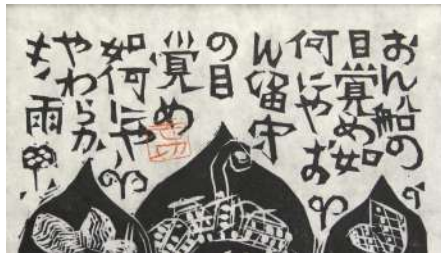
棟方 志功

棟方巴里爾シール

額のサイズ：縦55cm 横43.5cm

1959年（昭和34年）1月、棟方志功はロックフェラー財団等の招きにより、ご家族とともに山下汽船「山君丸」にて初のアメリカ渡航（約9ヶ月間）を果たしました。本作はその初渡米の年に制作された貴重な作品です。

画面上部には、「おん船の目覚め如何にやおん留守の目覚め如何にややわらかき雨」という和歌が刻まれています。太平洋を渡る船上の朝と、日本で留守を守る人々へ思いを馳せた、旅情と優しさに満ちた讃です。



22.

板画「天妃鼓笛の柵」

棟方 志功

棟方志功鑑定委員会 鑑定書有
額のサイズ：縦53.2cm 横41.6cm

20世紀日本を代表する版画家であり、独自の「板画」世界を切り拓いた世界的な巨匠・棟方志功（1903-1975）による作品「天妃鼓笛の柵」です。

画面いっぱいに描かれた躍動感あふれる天妃の姿と、力強い墨線、そして裏彩色（裏から筆で彩色を施す棟方独自の技法）による鮮やかで温かみのある色彩が絶妙に調和しています。生命感と祈りの情熱がほとばしる、棟方板画の真骨頂と言える圧倒的なエネルギーに満ちた逸品です。

棟方志功全集に同手の作品が掲載されています。



作家略歴（五十音順）

上田 恒次

1914（大正3）年 - 1987（昭和62）年
京都の呉服商に生まれる。富本憲吉の『窯辺雜記』を読み陶芸家を志すようになる。上田は京都市立第二工業学校（現京都市立伏見工業高等学校）陶磁器科を卒業し、独学で建築を学んだ。河井寛次郎に師事。日本橋三越本店美術部で自身初となる個展を開催する。以降は各地で開催。富本憲吉記念館建設にあたり、設計および工事を監督する。柳宗悦・浜田庄司・富本憲吉らとも交流があった。

河井 寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

島岡 達三

1919（大正8）年 - 2007（平成19）年
東京の組紐屋の家に生まれる。浜田庄司に学び、1953年、益子に窯を築く。組紐を転がし、そこに化粧土をかける縄文象嵌という独自の技法を生み出す。1996年、重要無形文化財(人間国宝)認定。

須田 尠太

1906（明治39）年 - 1990（平成2）年
日本の洋画家。埼玉県生。浦和画家。当初具象画の世界で官展の特選を重ねたが、1949年以降抽象画へと進む。力強い奔放なタッチが特徴と評される。司馬遼太郎の紀行文集『街道をゆく』の挿絵を担当し、また取材旅行にも同行した。

芹澤 銑介

1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

辻村 史朗

1947（昭和22）年 -
奈良県御所市に生まれる。昭和44年、作陶を始める。平成11年、裏千家茶道資料館にて「辻村史朗 壺と茶碗展」開催。平成15年、ニューヨーク・メトロポリタン美術館「ORIBE展」に出席。以降、日本各地、ニューヨークで個展開催。

バーナード・リーチ

1887（明治20）年 - 1979（昭和54）年
香港生まれ。1909年来日して、始め宮川香山、その後、楽焼を学ぶ。富本憲吉、濱田庄司、柳宗悦らと親交を結び、古陶磁・民芸の影響を受ける。濱田庄司を伴い帰英、セントアイブスに築窯する。以来、東洋陶磁とイギリスの伝統的な陶技の融合した作品を発表した。

濱田 庄司

1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年
神奈川県生まれ。東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科に入学、板谷波山に師事。同校を卒業後は、河井寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗悦、富本憲吉、バーナード・リーチの知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国するリーチに同行、共同してセント・アイブスに築窯。大正13年、帰国し、沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木県益子町で作陶を開始。昭和30年、人間国宝に認定。

4代 三浦 竹泉

1911（明治44）年 - 1976（昭和51）年
2代竹泉の長男。号 節月庵。京都美術専門学校に学び、絵画・陶芸ほかを修行。昭和6年、4代竹泉を継承し、製陶に従事。主に煎抹茶器を制作。作風はきわめて巧緻にして優美。昭和47年、長男徹に家督を譲り隠居す。

棟方 志功

1903（明治36）年 - 1975（昭和50）年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。